

自慢の町を みんなに観てもらいたい



左 岸田 日出紀 さん
Hidenori Kishida

右 三宅 光子 さん
Mitsuko Miyake

川に鯉のぼりが

今年5月、用瀬町内の瀬戸川で鯉のぼりが泳ぐ光景が訪れた人たちを驚かせました。こんな、みんながびっくりするようなことをやってのけたのは、「上方往来街並活用推進委員会」のみなさんです。

発足は今年の2月、その目的は、2009年の姫路鳥取線開通に向けて、用瀬町に観光客を呼び込むため、姫鳥線のルートとも言える『上方往来』をキーに『町の魅力』を発見・創出すること。メンバ

ーは学識経験者を含めた用瀬町の自治会役員のみなさん、23人です。

会長を務める岸田さんは「活動はまだまだ始まったばかり。すべてが手探りです」と遠慮がちですが、昔の町のにぎわいを取り戻したいという思いは人一倍。岸田さんに誘われてこの会に入った、観光ガイド部会長の三宅さんは、40年前、倉敷から用瀬に嫁いできた時、間近に迫る山や、現役の水車などを見て、カルチャーショックを受けたそうです。それが今では用瀬の虜に。「前から用瀬町をい

上方往来街並活用 推進委員会

ろんな人に紹介したいと思っていました」と二つ返事で入会を引き受けました。

プロデューサーは 観光客

まず取りかかったのは、今年3月31日に行われた、「用瀬の流しびな」でのあま酒の販売。委員会では、瀬戸川沿いの空き地に東屋あずまやを設け、手作りのあま酒を販売しました。「評判は上々で、観光で訪れた人との会話も楽しめ、とても有意義なものでした」と三宅さんは話します。

ここでのやりとりの中から

生まれたのが『川を泳ぐ鯉のぼり』です。瀬戸川は、昔、食器や野菜を洗ったり、早い流れを利用して水車を回して米を搗いたり、生活用水として使われていた地元の人思い入れの強い川。きれいな水の流れを見た観光客が、「こんなきれいな川、観光に使わないのはもったいない」しかし、観光について専門的な知識を持たない三宅さんにはどうして良いかわかりません。たまらず「どうしたらいいでしょうねえ」と尋ねると「鯉のぼりでも流してみたら」と言われたそうです。